

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 16 日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520072

研究課題名(和文)日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』「津島貝葉」の校訂テキスト作成

研究課題名(英文) Making a Critical Edition of Tsushimabaiyo, the Odia Mahabharata Discovered in Japan

研究代表者

Dash Shobha (DASH, Shobha)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：20460660

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、愛媛県宇和島市津島町に残る「津島貝葉」(17世紀初期ごろ書写されたと思われるオリヤー語版『マハーバーラタ』(=サーラー・マハーバーラタ)の「森林章・第一部」の貝葉写本)の校訂テキスト作成に関する研究である。インド国内外の様々な所蔵先から入手した9本の異本を用い校訂作業を進めた。正確な文字解読・入力のために「津島貝葉」に使用されている書体の文字表及びそのローマ字転写記号の決定版も作成した。『サーラー・マハーバーラタ』は二つの系統を持ち伝承されて来たことが明白になったことが本研究の著しい研究成果と言える。

研究成果の概要(英文)：The present research aims to make a critical edition of the “Tsushima-baiyo”. It is a palmleaf manuscript of the Aranyaka parba of the Oriya Mahabharata (Sarala Mahabharata) and seems to be written in the 17th century. Apart from the two published texts, 9 palmleaf manuscripts from different parts of India and Germany were collected and were used as variant manuscripts for this editing work. A chart of the script used in the Tsushima-baiyo was prepared with their diacritical marks for the correct reading of the manuscript as well as for the correct input of the critical edition of the Tsushima-baiyo. Through the present research of making the critical edition of the Tsushima-baiyo, it became evident that the Sarala Mahabharata has been transmitted having at least two lineages.

研究分野：人文学

キーワード：津島貝葉 マハーバーラタ 貝葉写本 Mahabharata Saraladasa palmleaf-manuscript Orissa Oriya

1. 研究開始当初の背景

現在、宇和島市教育委員会津島支所教育課に「津島貝葉」という貝葉写本が保管されている。それは、17世紀初頭に書写されたもので、江戸時代中期(18世紀)頃に日本に伝来したと考えられている。コロニー(Karaṇī)書体を使用し、中世オディア語(旧オリヤー語)で書かれた221葉(両面記載)からなるこの貝葉写本の内容はインド東部・オディシャー州(旧オリッサ州)の15世紀半ばの有名な詩人サーララーダーサ(Sāraḷādāsa)によってオディア語で書かれた『マハーバーラタ』すなわち、『サララー・マハーバーラタ』(Sāraḷā Mahābhārata)の「森林章」(āraṇyaka-parba)の第1部に相当するものである。

日本における『マハーバーラタ』の研究と言えば、数多くの成果があるが、その殆どがサンスクリット語テキストに基づくものに限られている。インドには、サンスクリット語だけでなく、オディア語を含む様々な地方言語で書かれた『マハーバーラタ』が数多く存在することはあまり知られていない。しかしそれらは、サンスクリット語で書かれた『マハーバーラタ』の単なる翻訳ではなく、それぞれの地方の文化の影響のもと成立した独自のテキストと言える。「津島貝葉」もサンスクリット語『マハーバーラタ』の翻訳ではなく、オディシャの文化の中で誕生したオディア版の『マハーバーラタ』になっている。管見の及ぶ限り「津島貝葉」は、日本に存在する唯一のオディア語・文字の貝葉写本であり、インド学の面からはもちろんのこと、江戸時代中期ごろから伝えられていると言われることから、近世日本外交史の面でも極めて貴重な資料と言えるものである。以上の点から、「津島貝葉」の研究は必要不可欠の課題である。

応募者は2008年度～2010年度まで「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』

の研究」という題名で(基盤研究C、課題番号20520048)3年間、「津島貝葉」のデジタル化、校訂ノート付きのローマ字転写テキストの作成、物語ごとに題名を付けた組立てや関連資料の収集を行なった。その際に、簡易ではあるが『サララー・マハーバーラタ』の校訂テキストに類似したものが40年も前に出版されていることがわかった。しかし、そこには数多くの校訂ミスが存在する。このような現状を鑑み、これまでの研究の継続として「津島貝葉」を底本とした『サララー・マハーバーラタ』「森林章」の校訂テキストを作成することとした。

2. 研究の目的

本研究において2008年度～2010年度の研究の際に作成した、本研究の対象としている「津島貝葉」の校訂ノート付きのローマ字転写テキスト(Diplomatic Edition)に加え、校訂テキスト(Critical Edition)を作成する。最終的にはそれを出版する予定である。ローマ字転写での校訂を行なうことにより、多くの研究者の利用の便をはかる。

現在、『サララー・マハーバーラタ』には二つのテキストが出版されている。それらは、*Mahābhārata: Bana Parba, Dharma Grantha Store, Cuttack, 1999-2000*(以下「DGS版」と略す)と *Sāraḷā Mahābhārata: Bana Parba, edited by Dr. Arttaballabha Mohanty, the Department of Culture, Government of Orissa, Bhubaneswar, 1966*(以下「ABM版」と略す)とである。これら全てを逐一参照しながら、校訂テキストを作成する。その際に、全てのバリエーションをローマ字転写で表記する。このような研究によって、「津島貝葉」をより正確に読むことが可能になるだけではなく、オディア語『マハーバーラタ』に使用されている単語のバリエーションが明確になり、オディア語『マハーバーラタ』が扱われていた地域も特定できる。「津島貝葉」の和訳/英訳を作成するには、

先ずその校訂テキストの作成が必要不可欠である。

残念なことに、オディアール語『マハーバーラタ』に関する上記二種の出版物は校訂作業の技術があまり発達していないことを物語っている。『マハーバーラタ』のような膨大な文献の中で「津島貝葉」は10分の1程度の分量しかないが、その校訂テキストを通じて日本の写本校訂の知識がオディシャーの研究者に伝わるとともに、それを見本にし、オディアール語『マハーバーラタ』の残りの部分の校訂作業が進められるであろう。本研究はこのような現地の研究者への還元という大きな意義を持っている。

3. 研究の方法

「津島貝葉」を底本とし、同系統の9本の異本（オディシャー州立博物館蔵6本、チュービンゲン大学図書館蔵1本、サンバルプル大学所蔵1本、個人蔵1本）を用い、校訂テキストの作成作業を始めた。まず、全ての異本を研究可能な形で入手したあと、4人の研究者のチームワークによって校訂作業を遂行した。それぞれが担当した箇所を毎年少なくとも2回読み合わせた上で最終チェックを行ないながら、校訂テキスト作成のため、様々なバリエーションの中から適切な語彙を確定するようにした。

2008年度～2010年度の研究では、「津島貝葉」のデジタル化、ABM版およびDG版の『マハーバーラタ』を参考にしながら、校訂ノート付きローマ字転写テキストの作成および物語ごとに題名を付けた組立ての作業を行なった。その継続として、本研究では、既に組み立てられた枠組みに合わせて、該当する写本の9本の異本および上記の二つの出版テキストに基づき「津島貝葉」の校訂テキストの作成作業を進めた。











そのために先ず、9本の異本を研究使用可能な形（マイクロフィルムからのコピー、デ

ジタル化された画像、申請者撮影）で手に入れ、その解読に取り組んだ。

そして、数名の研究協力者の研究補助（資料整理・データ入力・校正等）を得ながら研究を遂行した。

4. 研究成果

「津島貝葉」の校訂テキスト作成のために必要な異本を様々な所蔵先（オディシャー州立博物館蔵6本、チュービンゲン大学図書館蔵1本、サンバルプル大学所蔵1本、個人蔵1本）から入手し、その使用許可を得て、ローマ字転写の作業を行なった。また、「津島貝葉」に使用されている書体の文字表およびそのローマ字転写記号の決定版を作成し、ほぼ計画通り「津島貝葉」の校訂テキスト作成作業を進めることができた。作成した表の一部を以下に例示する。

	ka		tī
	ki		tu
	ku		ja
	kra		je
	khya		ti
	kha		tu
	khī		dhā
	khe		bha
	ṇa		ṇi
	tha		lā

加えて、校訂テキスト作成の際に獲得した以下の2点の研究成果は特筆に値する。

(1)「津島貝葉」の冒頭部にある300余りの偈はABM版の『サーララー・マハーバーラタ』や入手した9本の異本に含まれていないため、それは後に挿入された部分ではないかと推測されていたが、この4年間の研究の課程でそれは、「森林章」の前にある「Sabhāparba」（集会章）に納められていることが判明した。

このようにして、これらの300余りの偈は「集会章」の末尾、あるいは森林章の冒頭部に入れることによって『サーララー・マハーバーラタ』は二つの系統を持ち伝承されて来たことが明白になったことが大きな研究成果となる。

(2)「津島貝葉」の校訂テキストを作成するために、「津島貝葉」の校訂ノート付きのローマ字転写テキストに加え、入手した異本の該当箇所をローマ字入力し、偈ごとに平行に並べ、その相違箇所のリストを作成した。その際に以下のような問題の存在が明らかになった。即ち、入手した諸異本はそれぞれその内容や韻律が同じであるにもかかわらず、その表現の仕方或使用される単語までもが多くの場合異なっていることである。その違いは、それらが異本のバリエーションを示すものではなく、まるで同じテーマの内容を別々の人々が語っているかのような印象を抱かせる。参考として以下に数偈を例示する：

「津島貝葉」TB

śrī sabhā parba ante aranyeka parba kathā |
samasta apāda khaṇḍā e{15-a}<1>dulabha bāratā
|| 318 ||

A 写本

sabhā parba ante aranyeka parba kathā |
samasta pātakaḥ khandai bhava byathā ||

B 写本

sabhā parba antare aranyeka parbara kathā |
sate janmara pāpa khaṇḍāi sarbathā ||

C 写本

sabhā parba antareñ je aranye ka parba kathā |
sata janmamra pāpa khaṇḍāi śarbastā ||

D 写本

śrīsabhā parba antare aranyaka parba kathā |

suñileje mokṣa pāpa nalāge sarbasthā ||

E 写本

sabhā parba parba ante āraryaka parba kathā |
caturtha khaṇḍara je suñimā bāratā ||

F 写本

sabhā parba antare aranyaka parba kathā |
sapata brahmāṇḍare je subha bāratā ||

G 写本

śrīmahābhārata ye aranyaka parba kathā |
trutiya khaṇḍara ye Je suhiba bāratā ||

H 写本

śrī sabhā parba antare aranyaka parba kathā |
ṭṭia khaṇḍara je suhṛba bāratā ||

「津島貝葉」TB

kārttika rauṭhī guṛbāre pāṇḍabe āile aranye |
roheṇi nakṣatre pasile gahana bane || 319 ||

A 写本

risabha māsare pasile ghora bane |
kalyaba bane sehu pasile sedine ||

B 写本

riṣabha māse je pasile ghora bane |
roheṇi nakṣyatre pasile aranye ||

C 写本

risabha māse Je pasile ghora bane |
roheṇi nakṣatreñJe pasile aranye ||

D 写本

kārttika kṛṣṇa caturthi dina a ile aranye |
rohini nakṣatre pasile ghora bane ||

E 写本

kārttika śu kla daśami anakule |

āile gahanaku pāṇḍu rājā bāle ||

F 写本

kārttika kṛṣṇa cauṭhī guṛbāre āile aranye |
rohiṇi nakṣatre pisile pāṇḍabe gahana kānane ||

G 写本

kārttika kṛṣṇa pakṣa pratipadā dina |
rohiṇi nakṣatre pāṇḍabe pasile XXXXX ||

H 写本

kārttika kṛṣṇa pakṣa pratipadā dina |
roheṇi nakṣatre pāṇḍabe pasile ghora bana ||

「津島貝葉」TB

kāmyaka bane je rahile se dinara |
sedina ādi kari tera bachara || 320 ||

A 写本

ehi dinu ādikari tera barasara |
bipinye biharile paṇḍura kumara ||

B 写本

kāmyeka banare rahile se dinara |
e dinu ādikari tera sambachara ||

C 写本

kāmyeka bane rahile Judheṣṭira |
edinu ādikari tera samatsara ||

D 写本

kāmyeka banare rahile se dinara |
sehidina ādikari tera barasara |

E 写本

se dina rahile kāmyeka banare |
tera barasa bañcībe mahā dūkha ghore |

F 写本

kāmyeka baneJe rahile sehi dine |

yedinu ādikari tera tera sambatsara pariJante ||

G 写本

kāmyeka parba XXXXX
<3> se dinara | XXXXXXXXXXXXX

H 写本

kāmyeka parbatore rahile se dinara |
ye ādikari dina tera barasara |

当初、幾人かの研究者から、これは写本の場合によく見られる書写者による書き間違い(scribal error)や書写者のユーモアによる意図的な文字変更や文章変更(scribal mischief)ではないかとの指摘を受けていた。しかし、文字や読み方や文法構成のどれにも間違いはなく、内容的にも逸脱していないため、簡単に scribal error や scribal mischief と断定するのは難しい。

オディア語で書かれた説話文学はこのような仕方でも継承されることが普通であるのか、それとも「津島貝葉」をその一部とする『サーラー・マハーバーラタ』の場合のみにおける現象であるのかは、これまでの研究では確定できない。そのために、著者サーラーダーサの他の文献の写本にも同じような特徴が見られるのかどうかを確認する必要がある。しかし、本研究の成果は少なくともインド東部における説話文学の伝承形態を提示する一事例となり、貝葉写本研究および説話文学の研究に大きな手懸りとなるであろう。

さらに、『マハーバーラタ』を含むインドの説話文学の口頭伝承と受容形態の特徴も明確になるであろう。2014年3月にオディア語はインド政府によってインドの6番目の古典語として認められた。この研究によって、最も知られている古典語であるサンスクリット写本の性格との比較研究が可能になるだけでなく、同じ古典語を用いた文献

でも、地域や時代によってその口頭伝承の異なることが明らかになる。

上記の研究成果に加えて、「津島貝葉」の校訂テキスト作成の際に、校訂するためには、写本が関係する地域文化の十分な知識を有する必要があることも実感した。従って、「津島貝葉」の原作地であるオディシャーの地域文化のさまざまな要素（例えば、「森林章」に書かれている食物、病名、病気と祈りなどの正確な理解）の研究も併せて行なった。2015年1月に東方学院中村元インド哲学カフェの研究会に招聘され、その成果の一部を「インド東部・オディシャー州における民間療法と健康管理」というテーマで講演を行ない、多くの研究者と共有した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 1 件)

1. DASH Shobha Rani 「インド東部・オリッサにおける貝葉写本の研究動向」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第29号、査読無、2012年、pp. 239-255.

〔学会発表〕(計 2 件)

1. DASH Shobha Rani, 「インド東部・オディシャー州における民間療法と健康管理」（東方学院公開講座「中村元インド哲学カフェ」の第12回講座において行なった招聘講演）、2015年1月11日、大谷大学、京都。
2. DASH Shobha Rani, “Exploring Palm Leaf Manuscript Research: with a special reference to Odisha”, the 5th Beijing International Seminar on Tibetan Studies (BISTS), August 2012.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

DASH Shobha (ダシュ ショバ)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：20460660